

# 諷 (おくりな)

阿部 次郎

中秋のある日、黒石原の玄石居を訪れた。払われたばかりの襟野に形ばかりの垣をめぐらした新居は庭もまだととのつているとはいえなかつたが、秋色に満ちていた。

大人は頭に包帯をして赤チンが滲んでいた。大人は苦笑しつつ、怪我のことを語られた。要談はすぐすみ書齋での雑談に「雲の上の丘がいよいよ終ったね。」などと申された。司馬遼太郎著、秋山兄弟将軍と日露戦争をテーマにしたこの長編小説は、大人と私との折々の共通の話題であった。

私の帰りの車に便乗して病院まで包帯交換にゆくと云って大人は衣服を改め、下駄ばき、そして太い杖を曳いて出てこられた。

光風霽月のこの姿、この故山の閑居で起伏される日の永いことを私は雨の中で折った。

しかるに旧臘の大晦は金融機関も珍しい日曜の休みというので少し朝寝をしていたところ、大病院から石坂繁前市長

危篤の電話を受けた。臨終は午後二時二十五分、その間走馬燈のような思い出しに耽った。馳せつけた人々も沈痛な面持ちであった。

火葬は熊本市の特別の計らいで、元旦の午後二時に行なわれた。私は車のラジエーターグリルにつけた日の丸と輪飾りを下ろしてお供した。託麻斎場という旧臘二十七日に竣工した立派な市営火葬場の第一号として焼かれたことは、偶然とはいえず因縁深いものと思われた。四日自宅の密葬、五日お通夜であった。多くの知己友人も静かに退去された後、私もお暇のため供華に埋もれた御遺牌に近づいた。白木の遺牌には、

「弘毅院秩宗浄繁玄石居士」と読まれた。その弘毅という語句は言うまでもなく、論語泰伯篇の

「曾子曰く、士は以って弘毅ならざるべらず、任重くして道遠し。仁以って己れが任となす。亦重からず乎。死して後已む。亦遠からず乎。」の章の一語である。

周知のように、故人の学殖造詣は計り知れず、私にはとうてい語る資格などはないが、泰伯篇のこの章とその一つ前章にあたる託孤の章は、私ともよく話題に上ったものである。ことに士は以って弘毅なるべからずの一章は、故人は青少年

諸君に期待し、成人式の儀にしようと思ひ、一月六日は故人が精魂を傾けて計画した熊本市民会館の開館五周年に当たった。ここでこの日に石坂家及び熊本市と商大その他の合同葬が行われたことも奇縁として、敵爾にも盛儀となった会葬者の語草となった。

式の始まる前、故人の録音と生立ちからのスライドが映された。そのときに故人の筆蹟が大写しに出たが、それはこの泰伯篇の「士不可以不弘毅」という文字であった。私は、よき哉故人の戒名と思つた。故人が身を以って実践した信条のその一つを諷とされたことに故人も莞爾としていたであろう。

(熊本信用金庫理事長)

## 地方出版の喜びと悲しみ

久保田 義夫

熊本で出版される本の数も相当に多いことは、文化懇話会の会報などにも書かれている。地方史ならば、今やブームと言えるのではないかと思うが創作集など

## 忘れられない言葉

(作家 第一高校教諭)

米光 栄子

るが、克服できるだろう。ともかくも地方出版の安全策をたてないならば、何時までも中央のよだれをねぶるだけだろう。

肝臓を痛めて労働を許されない主人を抱え、息子と二人で忙しいハウス栽培のプリンスメロンの定植の時期が訪れた。水田が圃場整備されていないので可なり不便で骨を折るのである。何の作業も適期があるので忙しいのであるが、仕事があるから忙しきものであるが、何時まで二人でやっていくのであろうか、未だ息子に好きな人の噂も聞かぬまま今年に至った。そろそろ嫁さんのことも気になるのである。

そんなある時、生改グループの役員会の通知を手にする。農作業を止めて他用で出れば、農村では暇暮らしと言っていた。でも、その数日後の暇暮らしが何となく待ち遠しい。体を休め、知識も得られ、私の生活上うるおいになってくれ

# 想

# 随

は、うっかり出してみてから、その後始末にあわてるということになる。

「恍惚の人」は七週で百六十四万部も売れたというのに、才能のない者は仕方のないもので、五百部の本さえもてあますのである。それによせばよいのに、東京の匂いのしない本を作ってやれという気持ちをおこして、ますます惨めなことになるのであった。東京においてというのは、東京から出すとか、有名な作家から序文をもらうとかいうことだが、中央色のないものなんか、まともに相手にされない上に、小売店のルートに乗らないから、自分一人で本を処理しなければならぬ。

もつとも、今までお世話になった人に記念として進呈するという考えもあるわけだが、多少とも自作に自惚(うぬぼ)れを持ち、自費出版の金を少しでも取り返えそうとなると落ち着かないことになる。手も足も出ない気持ちになり、人様に對する日ごろの不義理がよくやまれる。暑中見舞、年賀状をかかさぬ政治家の気持ちがかかるようになる。

そんな時、医者をしている友人が電話でお前でなければ書けないと慰めてくれ、十冊送れという。あることでショックを受けていたこともあり、お礼の言葉も涙声になった。

それから間もなく、文芸八代の田口さんからも電話があり、それも望外に多い部数なのに狂喜した。これは田口さんの無類に親切な人柄のせいで、それ以外ではないが、こういう時に大切なのは友情であると思ひ知った。それにはまた多くの方々協力して下さったので、八代に十七年住んでお世話になったことの有難さもわかって来た。

それで因縁ある土地と人とを大切にしなければと肝(きま)に銘しているが、一方わたしが下手な創作集を出版したおかげで、飛ばっ散りを受けた被害者が多い訳で手放して感謝しておれない。そこで地方出版を中央なみに持つて行く方法をどうしても考えなければならぬ。下手に東京から出してもカモにされることが多いので、今のところ一つの方法として「豆腐屋の四季」の松下竜一氏の方法が思い浮ぶ。ひいきの読者に対して注文をとる、通信販売方式である。これは案外現代にマッチしているかもしれない。

しかし、これには会員獲得のための行動や運動が必要になってくるはずで、安のんな方法として九州一円を範囲として、小説なら小説の同好者、作家を登録して置いて、交換購読しあう方法はどうであろうか。これにもいろいろ問題はあ